

【俺】「…今日の相手はここかな？ ふふっ…今日も楽しみだなっ…♡」

俺はそう呟いて、手鏡を使って自分の姿を見る。

そこには、銀髪ロングで可愛らしい顔の、現役JKが映し出された。どんな表情をしても、変顔してもポーっとしていても可愛い美少女。それが今の俺、白神令奈なのだ。



…とは言え、本当の俺はただの会社員で、三十路過ぎたが独身で、

大した趣味もなく、家と会社を往復するだけの毎日を送っているつまらない男だ。

そんなある日、俺は何故か夜の間だけ、〇5歳の美少女JKである

白神令奈ちゃんの肉体に憑依して、自由に行動できるようになってしまったのだ。

当然俺は、その美少女の若い肉体の快楽を存分に貪りつくすべく、性行為に明け暮れた。

…そして今日は、薄汚い公園の公衆トイレから、逆レイプ生配信をする予定だ。

俺はドキドキしながら男子トイレの中に入り、配信の準備を始めるのだった。

ある日の事だ。俺はいつも通り、会社帰りに違法隠し撮りで、令奈ちゃんのレオタード写真を堪能していた。

しかしその時、俺はスマホに魂が吸い込まれるような不思議な感覚を味わった。俺は疲れを感じて、さっさと帰宅して眠りについた。

そして夜に目を覚ますと、俺は自分が令奈ちゃんの姿になっている事に気が付いたのだった。



とりあえず俺は令奈ちゃんの体をじっくり堪能してから、  
美少女の体でのオナニーを楽しんだ。



そして、翌日の夜中にまた令奈ちゃんの体で目が覚めたので、  
俺は色々調べて試してみた結果、  
どうやら俺の魂が令奈ちゃんに憑依しているという事が判明した。



そして俺は、令奈ちゃんの体で俺の本体が眠る部屋へ行き、  
レオタード姿で処女を卒業し、俺本体の童貞を奪ってやった。

それから調子に乗った俺は、令奈ちゃんの体で外出するようになった。

さらには動画配信サイトで生放送するようにもなった。  
美少女としてちやほやされるのはとても気持ちがいい。

見られたい欲が高まった俺は、配信事故を装い、  
令奈ちゃんの生オマンコを視聴者達に見せつけてやった。



そして、その放送事故配信でレイプを望む声が多く集まり、俺自身も、令奈ちゃんのレイプ生配信をしたいと望むようになっていた。



そこで浮浪者が根城にしている廃墟で生配信し、そこに現れた浮浪者にレイプされる一部始終を配信してやった。



そして俺は、浮浪者達にレイプされた仕返しに、浮浪者達を逆レイプする配信を行う事を約束した。

俺は夜中に廃墟で浮浪者を待ち構え、催涙スプレーで撃退し、彼ら全員を逆レイプして搾り取る様子を、生配信した。



こうして、逆レイプ変態女子校生として、

俺は令奈ちゃんの肉体で生配信とセックスを楽しむ事になったのだ。



：そんな事を思い出しながら、俺は目の前に置いたタブレットの配信ボタンを押し、カメラに向けて笑顔とピースサインを浮かべ、いつも通りの挨拶をする。

【俺】「こんばんは、白神令奈です。今日の配信をスタートします♡」

【視聴者】「お、待ってました令奈ちゃん！」

【視聴者】「今日も滅茶苦茶可愛いねえ！」

【視聴者】「今日は制服姿なんだね！ やべえ、もう勃起してきた」

【視聴者】「それはそうと、目の前に転がってるオッサンは何なの？」

俺が動画配信サイトで生放送を始めると、男達のコメントが殺到する。

マイナーなアダルト限定のチャンネルであるにも関わらず、

チャンネル登録者数は数十万人を超え、配信するたびに大勢の男達の目にさらされる。

俺は大勢の男達から向けられる称賛の視線を想像して恍惚としながら、言葉が続ける。

【俺】「この人ですか？ この人は、昼間の私にちよっかいを出すなど言っているのよ。昼間の私をストーキングして盗撮した変態キモオタおじさんです♥ファンクラブの人が捕まえたという報告を受けたので、今日はこのおじさんをお仕置きする配信をしたいと思います♥」

【視聴者】「ああ、令奈ちゃん昼間は普通に真面目な学生だもんね」

【視聴者】「そのオッサン、俺達の鉄の掟をやぶったのか。」

令奈ちゃんに何かあったら配信できなくなるだろうが、全く……」

【視聴者】「そんな事する奴は、二度と勃起できないよう搾り取るしかないよね」

僕がそう告げると、「コメント欄が二気に盛り上がりを見せる。

正直、こんな美少女に搾り取られる事は、お仕置きではなくご褒美なのだが、

僕の配信ではこれが二つのパターンとなっており、とても受けがいいのだ。

俺はドキドキしながら、チンカスマみれのキモオタのペニスの上にまたがった。



【俺】「んっ…それじゃあストーカーさん、たっぷり搾り取って、

懲らしめてあげますから、覚悟して下さいね？」

【男】「こ、この声っ…まさか令奈ちゃんっ！？ うおおおおっっっっ！」

俺がそう話しかけると、男は歓喜の声を上げて、さらにペニスを固くさせる。

男は特殊な薬液を使わないと剥がせない目隠しをされている上、

麻痺薬を盛られており、満身に体を動かす事が出来ないが、

精力剤によってペニスだけはギンギンにさせられている。

この男の生殺与奪の権利が、こんな細腕の美少女である

この俺にあるのかと思うと、ゾクゾクと興奮してくる。

そして俺は腰を持ち上げ、濡れてほぐれた割れ目をあてがい、

そのチンカスマみれのペニスを飲み込んで行った。



《ずいゆっ…ずぶううううううう…♡♡♡》

【俺】「んっ…あああうっ♡♡♡」

【男】「う、うおおおっ！ は、入ったっ…！」

令奈ちゃん…童貞卒業したっ…！」

ストーカー男のペニスが膣内に埋没すると、

にちやりとしたチンカスが膣壁に付着する感触が伝わる。

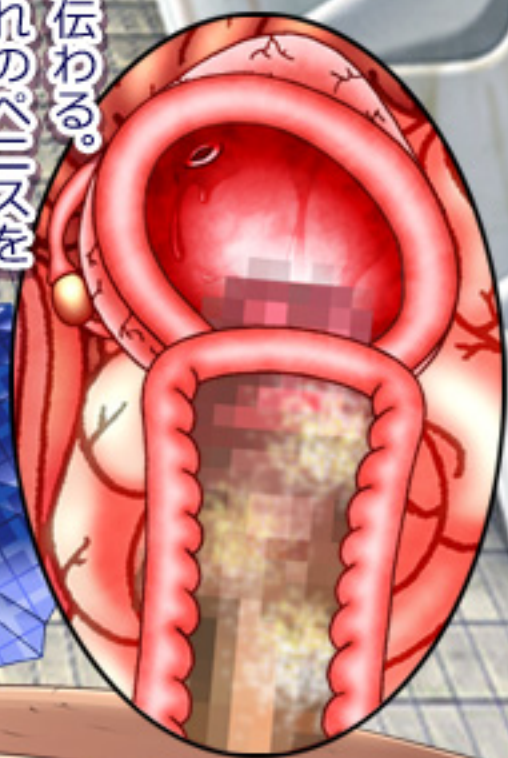
こんな美少女が、こんなキモ男の、チンカスマミれのペニスを

生で挿入して、膣内をチンカスマミれにされている。

その状況を想像するだけで、俺は絶頂してしまいたいことになる。

しかし、まだまだ本番はこれからなのだ。

俺は膣穴を締め付けながら、腰を上下に動かしていく。



《ずちゅっ…ぬちゅっ…ずちゅっ…》

【男】「き、気持ちいいっ…これが令奈ちゃんの…」

め、目隠しを外してくれえっ…!」

【俺】「んっ…♡ ダメですよっ♡」

それじゃお仕置きになりませんから…♡」

【男】「そ、そんなあっ…ひいいいっっ…!」

俺は男の悲鳴を無視して、膣を締め付け腰をゆっくり動かす。

こうすると、少しずつチンカスがこそぎ落とされて、

膣壁に塗り込まれ、膣奥へと押し込まれていく感覚が伝わる。

令奈ちゃんの大事な所が、こんな男のチンカスで汚されていく。

俺はその感触に興奮しつつ、腰を激しく動かした。



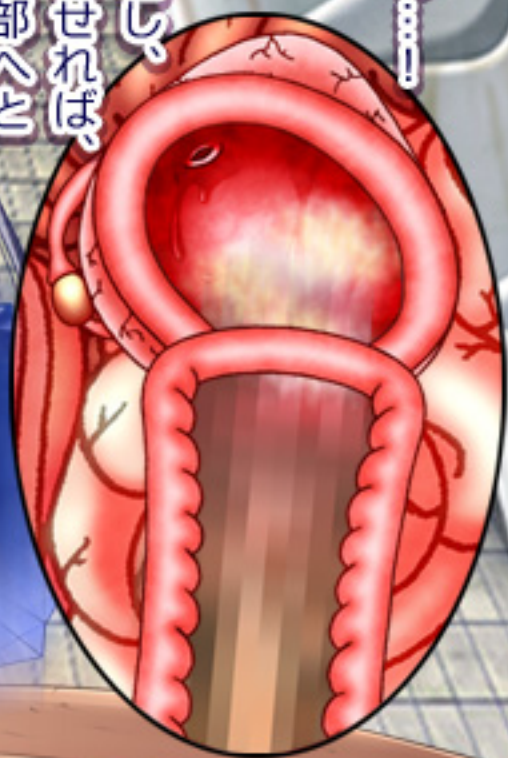
《ぐちゅっ！ ぬちゅっ！ ずちゅっ！》

【男】「ふおおおおお！？ い、いきなり激しっ……」

ああああっっっっ！？」

【俺】「あっ！ ひっ！ ああっ！」

ペニスに付着していたチンカスを全てこそぎ落とし、チンカスを最深部に押し込んだ状態で腰を上下させれば、ペニスが子宮口にねじ込まれると同時に、子宮内部へとチンカスが押し込まれていく感触が伝わってくる。勿論それだけでなく、ギンギンに勃起した硬いペニスに子宮口をえぐられる感覚はとても気持ちが良い。俺は悲鳴に近い喘ぎ声を漏らしてしまう。



【視聴者】「おお、令奈ちゃん今日は随分激しいねえ！」

【視聴者】「セックスに集中しすぎでしょ」

【視聴者】「ストーカーのチンカスおちんちん、

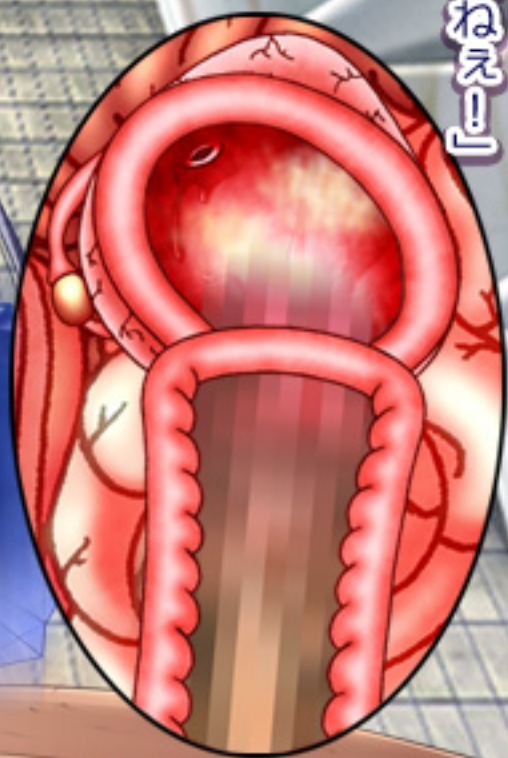
そんなに気持ちいいかい？」

【俺】「はいっ…♥ チンカスマみれでっ…

とっっても気持ちいいですっ…♥♥♥」

《ぐちゅっ！ めちゅっ！ ずちゅっ！》

令奈ちゃんの大事な所がチンカスで汚されている、その状況に興奮して、すっかり配信中である事を忘れていた。俺はカメラに向かって笑顔を浮かべ、ピースサインを向けた。そしてその直後、男のペニスがビクンと強く脈打った。



【男】

「も、もう出るっ！ 令奈ちゃんっ！

おおおおおおおおおっっっっっ！

《びゅるっ！ びゅるるるるっっっ！》

【俺】「おっ♡ おほおおおっっっ♡♡♡」

俺の意識が放送に向かった直後だったので、

半ば不意打ち気味な男の射精に、俺は無様な声を上げる。

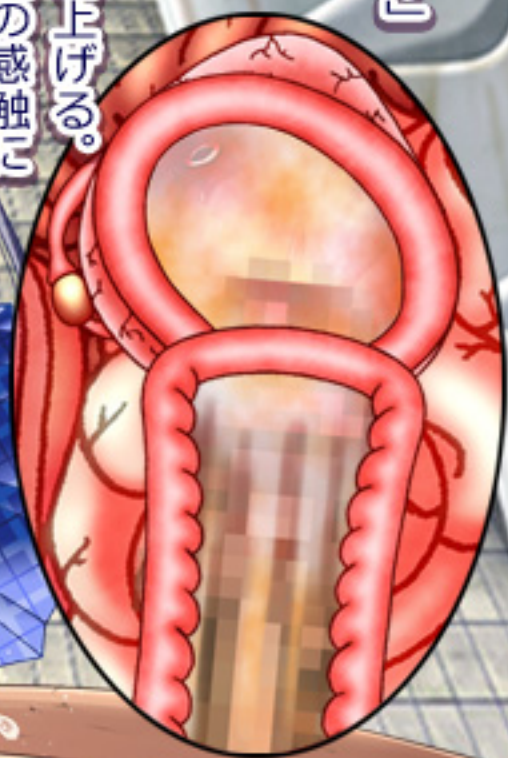
子宮に押し込まれたチンカスの感触が、男の精液の感触に

塗りつぶされていき、そしてその感触は子宮内全体にしみ込んで、

俺の下腹部を熱くさせ、強烈な快楽となって広がっていく。

俺はピーサインを作ったまま絶頂し、

無様な表情を視聴者へ見せつけるハメになった。



【男】「おおっ…っ、搾り取られるっ…」

《びゅるっー！ びゅくっー！ びゅるるっー》

【俺】「びゅっ♡ ああっ…♡」

【視聴者】「おお、令奈ちゃんイッてるイッてる」

【視聴者】「それにしても、射精長すぎだろアイツ」

精力剤の効果によって、男は限界を超えて射精する。

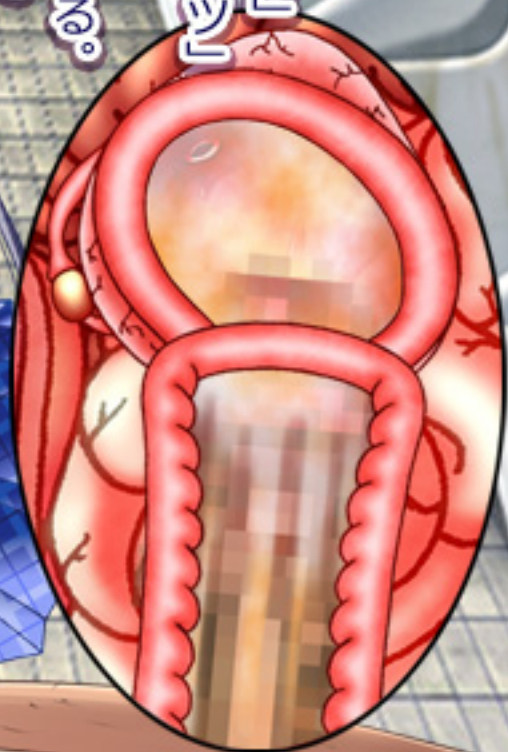
令奈ちゃんの子宮は、あつと言う間に男の精液で

パンパンに満たされ、精液が卵管にまでしみ込んでいく。

俺はその感覚で何度も絶頂し、体を小刻みに痙攣させる。

それから数分間、男は精液を吐き出し続けた後、

満足そうな顔でぐったりとしていた。



【男】

「ふう…気持ち良かったよ令奈ちゃん…」

「こんなお仕置きならいつでも大歓迎だよ」

【俺】

「はあ…♡ はあ…♡ ふふ…♡」

「あなたは一体何を言っているんですか？」

「お仕置きはこれからですよ？」

【男】

「…えっ？ そ、それってどういう…」

《ぐちゅっ！ どちゅっ！ ずちゅんっ！》

【男】

「ぐげっ！？ あがぁあっっっ！…！

ひっ！？ やめっ…！ おごおおお！？」

俺がいきなり、膣を締め付けて腰を上下に激しく動かすと、  
絶頂の余韻に浸っている男の顔が、苦痛で歪んだ。





【視聴者】

「おお、始まった始まった。令奈ちゃんのお仕置き」

【視聴者】

「天国から地獄うてまさに」レだよな」

《ぐちゅっ！

ぶびゅっ！

ぐびゅんっ！》

精力剤によって無理やり勃起させられ、限界を超えて射精させられたペニスは、きわめて敏感になっている。その状態でなお無理やり勃起させられたまま、強く締め付けた状態で激しくごいてやればどうなるか。快楽を通り越して、強烈な苦痛がこの男を襲う事になるのだ。

【俺】

「ほらほら、もう少し頑張ってくださいねっ♡」

【男】

「やめっ！

ぐげっ！

おおおー！」



それから数分間。男は無理やり勃起させられ、痛みを与えられながらも射精させられて、男は地獄を何度も味わい、そして俺は射精による絶頂で、再び天国を味わう事になった。そして全てを吐き出しつくした男は、口から泡を吹いて気を失った。

【令奈】 「はあっ♡ はあっ♡ …あーあ、ストーカーさん気絶しちゃいましたね♡」

【視聴者】 「令奈ちゃんお疲れ様！ 今日のお仕置きも見ごたえあって楽しかったよ！」

【視聴者】 「これでこの変態も、二度と令奈ちゃんに手出ししようとはしないだろうな」

男の意識に反して、いまだに勃起し痙攣するペニスを、膣深くに突き刺したまま、俺は絶頂の余韻を味わっていた。この強烈な快楽は、女の体でなければ味わう事が出来ない。俺は令奈ちゃんの肉体に心底満足を覚えていた。



俺は、気絶してぐったりと横たわるストーカー男のペニスを引き抜いて、その場で膝をついて立ち、スカートを軽くめくりあげ、性器をカメラへと見せつけた。そして締め付けていた膣の力を緩めると、ストーカー男が吐き出した精液があふれ、トイレの床に白濁した水たまりを作り始めた。



《ごぼっ…びちゃびちゃ…》

【俺】 「んんっ…♡ あふれて来たっ…♡

今日もいっぱい出されちゃいました♡」

【視聴者】 「相変わらず凄い量だな…やばすぎる…」

【視聴者】 「そりゃ令奈ちゃんに逆レイプされたら、女性恐怖症にもなるわ」

明らかに人間が絞り出せる限界の射精量を超えた精液があふれ出してくる。

男に与えられた精力剤がそんなにヤバい代物なのか、それとも令奈ちゃんの才能なのか。俺は快楽を反芻しながら、股の割れ目からあふれ出す大量の精液をポーンと眺めていた。

【俺】「…そろそろ片付けしなきゃ」

しばらく快楽を反芻した後、俺ははまだあふれ出す精液をふき取り、そしてタンポンを膣奥へとねじ込んで蓋をした。

【視聴者】「流石、精液は貯めこんでおくんだね」

【俺】「はい♡ 精液の感覚が好きなんです♡♡」

【視聴者】「確かもうすぐ体操の発表会だったよね？」

子宮の中にチンカスと精液抱えたまま、発表会で演技するのか…絶対見に行くわ」

【俺】「ありがとうございます、でも昼間は手出し無用ですからね？」

俺は視聴者に釘を刺した後、笑顔とピースサインで動画を締めくくった。

そして令奈ちゃんの体を自宅まで送り届けた後、俺は満足して眠りについたのだった。



翌朝。私はいつも通りの時間に目を覚まし、体を起き上がらせる。私の名前は白神令奈、友達からは天然とか言われてるけど、普通のJKだと思っ。そんな普通のJKであるはずの私は、何故か最近、Hな夢ばかりを見る。しかも、まるで現実のような、妙に生々しい夢ばかりだ。

【令奈】 「私、またあんな夢見てる…!」

昨晚の夢は、男子トイレでおじさんを犯し、チンカスと精液を搾り取る夢だった。夢から覚めた今でも、下腹部に違和感を感じる。体をくの字に折り曲げるたびに、子宮の辺りから、どろり、ねちゃりとした感覚が伝わって来るようだ。

私はそんなにも欲求不満なのだろうか、それともただの変態なのだろうか。私はそんな考えを、冷たいシャワーで洗い流し、出掛ける準備をした。



【令奈】「それじゃ行ってきます」

今日から季節も変わるので、私は冬用のセーラー服に身を包んで家を出た。今日の行先は学校ではなく、体操の発表会があるスポーツセンターへ向かう。とは言え、学校の部活で出る発表会ではなく、個人で申し込むタイプの小さい発表会だ。なので、私の学校の体操部から参加する生徒は、私一人しかいない。

【令奈】「……うういう発表会で度胸を付けて、慣れていかないとね……」

私は誰に聞かせるでもなく、まるで言い訳のように呟く。

本音を言えば、最近のHな夢の影響で、自分のちよつと恥ずかしい姿を、大勢の男の人に見られたいという願望が強くなっているのが理由だ。

だから私は、冬用のセーラー服であるにも関わらず、ノーパンノーブラで外出している。勿論、これも度胸を付けるための練習……という言い訳をしながら、私は駅へと向かった。





そしてその直後、電車によって発生した強い風が、ホームに吹き込んで来たのだった。いつもの通学時間であれば、電車待ちの人が多く居て、吹き込んだ風が強くあたる事などありえない。しかし今日は違った。油断していた私は、その風で思いきりスカートをめくりあげられてしまった。

【令奈】「あっ……！」

【男性客】「おおっ……！ 見えっ……！ えっ……？」

電車待ちの男性客の視線が、私のスカートの下に集中する。

一瞬だけ歓喜の声が上がった後、その声は飲み込まれ、そして電車の騒音に消えていく。いきなりの事に私は固まってしまい、バタバタとひるがえるスカートを抑える事も出来ず、電車待ちの男性客たちに、ノーパンのお尻を見せつけるまま、その場に立ち尽くした。

この場所でスカートをめくり上げたら……そんな妄想が、即座に現実になってしまった。

私は大勢の人にノーパンがバレてしまった恥ずかしさと気持ち良さにドキドキしながら、何事も無かったかのような顔を装って、電車に乗り込み、スポーツセンターまで移動した。





【令奈】「……まさか、本当にスカートがめくれちゃうなんて……」

不幸中の幸いか、私のスカートの中を見た人は、同じ車両に乗り込んで来る事が無かった。もしノーパンである事を知った人が同じ車両にいたら、何をされていただろうか。私はそんな妄想をして、ほんの少し残念に感じつつも、無事にスポーツセンターまでやってきた。

【見物客】「お、発表会参加者の人かな？ おはよう」

【見物客】「今日の発表会、応援してるからね、頑張ってるね」

【令奈】「あっ……おはようございますっ……はい、頑張ります……」

スポーツセンターの入り口には、カメラを持った大勢の男の人が待ち構えていた。

学校の部活で参加する正規の大会よりも多いんじゃないかと思うほどだ。

こんなに大勢の男の人達に見られると思うと……私はドキドキしながら更衣室へと向かった。



【令奈】「…見物客はめっちゃくちゃ多いけど、選手は少ないさそう…」

私が更衣室に入ると、一般の発表会だからか参加する生徒はかなり少なく、更衣室の端に移動すると、まるで貸し切りで着替えているような錯覚を覚える。考えてみれば、体操部の部長も、あの発表会の見物客はカメラばかりだから、参加するのはあまりお勧めしないと云っていた気がする。確かに、小さい発表会なのに会場が広い上に、見物客は男の人ばかりだ。あんな大勢の男の人達に見られながら演技するなんて…。それを想像し、ドキドキしながら着替えを進めた。

【令奈】「そう言えばこのレオタード…」

着替えた終えた所で、私はこの服装で処女を卒業する夢を見た事を思い出した。あの時の生々しい感覚を思い出しつつ、私は興奮で顔を赤くしながら、体育館へと移動した。



私が体育館へと出ると、見物客の男性達は、体育館の中央を取り囲むような形で配置されていた。思っていたより凄い人数に、緊張と興奮で鼓動が早くなり、頭が真っ白になっていく。

【見物客】「あれが令奈ちゃんのリオタード姿か…やべえ、めっちゃ可愛いな…」

【見物客】「白いハイグレリオタードが凄く似合っていていいな」

【見物客】「リオタードがお尻に食い込んでるし、胸もよく見たら…んぐり」

【令奈】「あっ…」

見物客達のそんな噂話が、緊張している私の耳に飛び込んで来る。

そう言えば、朝の電車での一件もあって、色々妄想しながら着替えをしていたからか、うっかりインナーを付け忘れていた事に気が付いた。

【責任者】「…白神令奈君、インナーをつけ忘れていないかね？」

発表会責任者が私に近づいて質問をする。そして私は、私にとっても予想外の回答をしてしまう。



【令奈】「…いいえ、忘れたわけではなく、つけていないんです。」

私、演技中は体温が上がりやすいから、熱中症対策で…」

私が審査員と見物客の方を向き直り、そうやって堂々と説明をすると、彼らの視線が一斉に私の胸と割れ目に集中し、体育館内に大きなざわめき起きた。



【責任者】「ね、熱中症対策か…そういう事なら認めないわけにはいかないな…」

【見物客】「あんな薄手の白いレオタードでインナー無しで演技するのによ…」

【見物客】「やべっ…よく見たら、胸と割れ目が軽く透けて…んぐり…」

これで私が、自分の意志でインナーを付けずに発表会に出ているという事になってしまった。

籍に者も、審査員も、そして見物客も、私を見る目がギラギラとした欲望に満ちているのがわかる。

私は直接大勢の視線に晒される興奮にドキドキしながら、自分の出番を待った。

【審査員】「それでは、白神令奈さんの演技です」

【令奈】「はいっ—」

私は元気よく返事をして、演技を始めた。ゆったりとしたクラシックが流れる中、私は片足を大きく上げる、ハイキックのような動きを交えた演技をする。

当然、そんな動きをすれば、ハイレグのレオタードはさらに食い込み、割れ目をハッキリと浮き上がらせていく。

【見物客】「うおおおっ…！　すげえっ—」

【見物客】「く、くいこみがっ…割れ目がっ…」

「一気に炊かれるカメラのフラッシュ。私はその視線に、興奮状態で演技を続ける。」



私はさらに演技を続ける。

先ほどとは違い、今度はチアリーダーのように、

片足を大きく上げて、見物客に向けて

笑顔とピースサインを見せつける。

すると、見物客から再び歓声が沸き起こり、

激しくフラッシュが炊かれていく。

【見物客】

「出たー！ 令奈ちゃんのダブルピース！」

【見物客】

「動画ではいつも見てるけど、生で初めて見た……」

【見物客】

「美少女のダブルピースは最高だな」

……えっ？

動画ではいつも見てる……？ どういう事なんだろうか。

私はその事に引っかかりを覚えつつ、演技を続けていく。

そうしているうちに、演技の時間も終わりに近づいてきた。私は最後のしめとして、片足を大きく上げ、片手で支える、I字バランスのポーズを取り、見物客に見せつける。当然だが、同時に歓声とフラッシュが私を包み込んだ。

【見物客】「ほ、本物のI字バランスだ……」

【見物客】「……あの食い込みであの恰好……」

無防備すぎてヤバすぎる……」

【見物客】「配信動画でも充分可愛いけど、

やっぱり生は違うなあ……」

【見物客】「身に来て良かったな」

まただ。また配信動画と言ってる。

もしかして、私の動画がどこかで

配信されているのだろうか？

しかし、動画配信なんて事は、

夢の中くらいしかしていない。

私は心の中に引っかかりを抱えたまま、

演技終了の時間を迎える事となった。



演技の終わった私は、一旦制服に着替えるために更衣室へと戻った。興奮で体が火照っており、下腹部が疼いて仕方ないが、まだ表彰式が残っている。私は疼く体を何とか我慢しながら、レオタードを脱いだのだが…。

《ちゅぽんっ…ドロツッ…》

汗で張り付いたレオタードを引っ張った際、タンポンが抜けてしまった。…って、私、いつの間にタンポンなんて入れたんだっけ…？それに、この溢れて来る大量の乳白色の液体は…？少し手に取って匂いを嗅ぐ。夢で散々味わった、精液の匂いだ。

【令奈】「…ま、まさか…アレ、夢じゃなかったの…？」

私は愕然として、ただただ流れ落ちる精液を見守る事しか出来ずにいた。

